

地域がビジョンをつくり、実行する

4

阿寒湖温泉

——前田一步園の理念を生かす

公益財団法人日本交通公社
研究調査部長

梅川 智也

「北海道の名付け親」と称される松浦武四郎が六回目の蝦夷地踏査で阿寒の地を訪れたのは、一八五八年（安政五年）のことといわれています。そして、ほぼ五十年後の

一九〇六年（明治三十九年）、明治新政府の経済閣僚・前田正名（まきな）によって初めて阿寒湖畔の開発が着手され、一九二二年（明治四十四年）、最初の温泉旅館が山浦政吉によって開設されました。その後の約百年が阿寒湖における観光地づくりの歴史となります。

観光客は一時を除き、ほぼ順調に推移してきたものと推察されますが、

この十年間の観光客数は、時計の針をほぼ四十〜五十年、逆戻りしたような激変に見舞われました。

私が上司に同道して初めて阿寒湖を訪れたのは、一九九九年十月二十四日日曜日のことでした。将来の阿寒湖温泉に危機感を感じていた町長を始めとする関係者の方々が、今後の方針を検討する会議に休日を返上して集まっておられました。その日を契機に十年以上に及ぶ阿寒湖の皆さんと当財団とのお付き合いが始まりました。

この間、私が常々紹介したいと思っていた組織があります。それは一

般財団法人前田一步園財団。日本型ナショナルトラストともいうべき組織で、阿寒湖周辺に約三千九百ヘクタールの土地を所有、土地の貸付と

温泉の販売などで広大な森林を管理し、阿寒湖の自然を守り続けています。全国的に見ても極めてユニークな活動を行っておられる組織といえるでしょう。先日、二時間以上にわたり前田三郎理事長（写真1）にインタビューさせていただき、今、改めて思うことは、阿寒湖の「自然」だけでなく、「人々の生活」をも守ってきた前田家の「志」の高さ、そして深さです。前田正名（まきな）、正次（しょうじ）、光子（みつこ）



写真1 前田三郎理事長
（インタビュー日時：二〇二二年八月三日）

の三氏、そして現在の三郎氏が引き継いできた前田一步園の理念を、これから「阿寒湖の遺伝子」として次世代に紡いでいってもらいたいと願っています。

前田正名という「人」

今年（二〇二二年）一月の宝塚雪組公演『Samurai』（原作・月島総記『巴里の侍』）は、二十歳でフランスに留学し、普仏戦争（注1）に巻き込まれ

た若き日の前田正名を描いたもので、私にとつては初めての宝塚観劇でした。それは冒頭、「阿寒湖を自然のままに守る」という正名の志を引き継いだ光子（元タカラジェンヌ）が登場する印象的なシーンから始まりました。

薩摩藩の貧しい漢方医の六男として生まれた正名は、十六歳で長崎に留学（藩費）、その後、坂本龍馬から最も文明の進んだ国として紹介されたフランスに留学するため、和訳

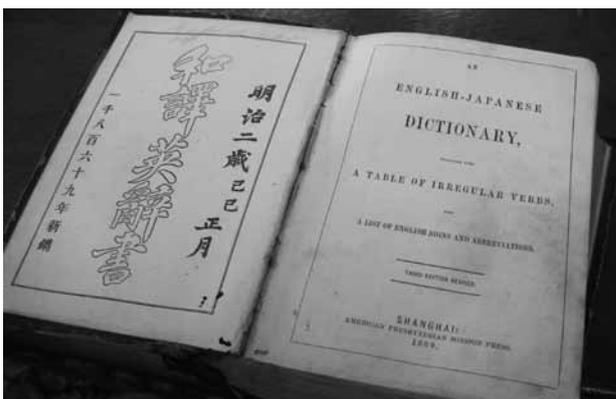


写真2 薩摩辞書（前田一步園財団所蔵）

英辞書、通称「薩摩辞書」（写真2）を編纂、当時は日本に印刷技術がなかったことから上海で印刷し、その辞書を買った資金を元手に一八六九年（明治二年）、フランス人であるコント・モンブランの随行として横浜を出発したのです。

正名は普仏戦争に参加するという貴重な体験を通じて、西欧文明に対する劣等感から解放され、日本文化の貴重性と近代化の方向性（殖産興業政策）を確信するに至りました。それは、いきなり西欧から移植された大工場中心の産業政策から始めるのではなく、生糸や茶、絹織物などが国の在来産業の振興と直輸出による流通の近代化によって地方産業の振興から始めるべきという考え方でした。しかしながら、そうした考え方は時の政府・松方正義らと対立し、農商務次官を最後に四十一歳で退官してしまっています。西欧の最新産業経済事情を背景として輸出産業の保護・育成と直輸出を主張した『興業意見』の編纂は正名最大の功績の一つといわれています。

北海道への関わり

正名と北海道とのつながりは、退官後の一八九二年から始まる全国行脚（前田行脚といわれる）の一環で、翌年の北海道遊説だと思われず。その後一八九九年（明治三十二年）、釧路・天寧（てんねい）に前田製紙合資会社を設立、一九〇六年には北海道国有未開地処分法に基づき阿寒湖周辺の広大な土地を取得しました。私が注目したいのは、当初は、耕作と牧畜植林に供するため¹の目的で、国から土地の払い下げを受けて農場・牧場の経営に乗り出したのですが、西欧への留学経験のある正名は、阿寒湖一帯の濃い針葉樹とマリモが生息する湖との調和に魅せられ「スイスに勝るとも劣らぬ景観」と感嘆し、「この山は切る山ではなく、観る山にすべきである」と観光地への展望を洞察していることです。

その後、一九三二年（昭和六年）に自然公園法の前身である国立公園法が施行され、一九三四年（昭和九年）に阿寒湖、摩周湖、屈斜路湖を含む約九万ヘクタールが阿寒国立公園として指定されました。その指

定請願が帝国議会に提出されたのは、正名没年の一九二二年（大正十年）でした。

現在、「阿寒国立公園の父」といわれているのは、最初にその景勝を紹介した松浦武四郎とされていますが、前田正名は国立公園指定に向けたもう一人の父といっても過言ではないと思います。

前田一步園の由来、 そして前田光子の 自然観

正名は地方産業振興の一環として茶業や酒造業、商工会、農協など実業界の組織化運動を展開していく一方で、全国各地で模範となるよう牧畜、果樹園、林業などの事業を興していきました。「神戸オーリーブ園」や「播州ブドウ園」などですが、その事業体に付けた名称が「地名+前田一步園」でした。この一步園の名称は、正名の座右の銘「ものごと万事に一步が大切」に由来しています。しかも一步を踏み出すときに、どういう方向に、どういう方法で踏み

出すのか、それが最も大事なのだと。ただ、正名の模範事業は、各地で随分と苦勞したようです。「前田家の財産は全て公共事業の財産とす」という家憲を遺して他界、最後まで残った阿寒前田一步園を次男である正次に託したのでした。

二代目園主正次は「雄大な阿寒湖畔の自然を、後世にわたり存続させたい」という父の遺志を固く守り、阿寒国立公園指定に努力し、切山から観る山々を実現すべく湖畔を本格的な観光地として発展させることを目指します。そして友人である石坂泰三（元経団連会長）や武見太郎（元日本医師会会長）ら周囲の反対を押し切って、これから地域の住民が旅館や住宅などを建設するだろうから、そのための木材が必要だと一九五四年、(株)前田一步園製材所を設立するのです。

阿寒の自然に永く 守られる。ための光子の知恵

一九五七年、正次没後、その妻・光子が前田一步園三代目園主となります。光子最大の功績といえは、自

分が亡くなったら間違いなく阿寒の土地と森林は切り売りされてしまうという危機感から、ほぼ十年をかけて構想してきた前田一步園の財団法人化を一九八三年に実現し、全ての財産を寄付して阿寒の美しい自然を後世に残そうとしたことです。光子の自然観は「自然は最高の師なり」であり、それは彼女自身が起草した次の財団設立趣意書に端的に表れています。

「……自然保護と言う人間の思い上がりです。自然を保護するのはなく、大きく自然の保護を受けていることが真の自然保護であり、私達の生命の糧とわきまえて、如何にこの大切なものを永存すべきかを深く考えるところであります」

また、アイヌの人たちへの思いも深く、天性の芸術的才能である木彫によって自立の道を歩めるよう土地などを無償で提供しました。それが現在のアイヌコタンの基礎となっています。一九八三年、七十一歳で亡くなった光子ですが、その後も「阿寒の母」と慕われ、今でも地元の方々からその人柄がしのばれています。

阿寒湖観光への危機感 と将来ビジョン『再生 プラン2010』

前述したように、阿寒湖の観光客数は二〇世紀中は順調に推移してきましたが、二一世紀に入ってから激変に見舞われます。団体客から個人客への変化、航空政策の自由化、有珠山の噴火など外部環境の変化もありますが、基本的には阿寒湖温泉全体がこれまでの成功体験からそうした急速な環境変化に対応できなかつたことが要因と考えられます。「お客さまは本当に阿寒湖が目的で来ているのか、それとも旅行会社のツアーにたまたま入っていたので泊まっているのか……どうやら、後者の

ほうが多いようだ」という、将来に向けた不安や危機感が当時の関係者の共通する認識であったと思います。そして、当財団と協働して再生に取り組む阿寒湖温泉でのまちづくりが二〇〇〇年から始まりました。

住民参加を軸足に据えて

われわれは、まず地域共通の目標となる十年後の将来ビジョンを住民参加型で策定することを提案し、そこから構造改革に向けた取り組みを始めました。観光客や住民意識など各種調査や関係者へのヒアリング調査、そして四つの部会に分かれてワークショップを開催しながら計画づくりを進めました。また、阿寒湖のライバルをしっかりと学ぼうということ



写真3 『阿寒湖温泉再生プラン2010』

で、カナダの湖畔観光地への視察にも出掛けました。そのメンバー十数名がその後のまちづくりの担い手となってくれたことは望外の喜びでした。そうして二カ年をかけて二〇〇一年度末、策定したのが『阿寒湖温泉再生プラン2010』(写真3)です。「心

地よい湖畔、ゆつくり温泉・阿寒湖

「二泊三日できる湖畔観光地を目指して」を将来目標とし、五十三のプロジェクトが提案されました。そのなかには、前田一步園の理念やアイヌの人々の生活文化などを織り込んだ阿寒湖のまちづくり規範『まよりも家族憲章』も入っています。報告書は机の上で飾られることなく、自分たちが参画して創り上げた活性化の処方箋であり、バイブルであることから、まちづくりの核となる人々は章ことに付箋を付け、背表紙がぼろぼろになるまで読み込んで使っていました。

地元の方々に寄り添う当財団の活動

われわれの業務は、調査や計画が出来上がって終了となるのが通常ですが、地元の方々にとっては実はそこからスタートになります。そこで2010プランに位置づけられたプロジェクトの実現に向けた支援をわれわれの役割であると定め、研究会の立ち上げから国の補助事業導入まで具体的かつ真摯に、地元の方々とともにまちづくりを進めまし

人コラム

阿寒湖温泉の人々へ大自然の厳しさが結束力の強さに

小林 一志氏 (株)阿寒観光汽船代表取締役社長・阿寒観光協会まちづくり推進機構副理事長
小林 恵美子氏 まりも倶楽部部長

前田光子さんは阿寒湖の自然だけでなく、いつも私たち住民を温かく守ってくれていたように感じます。毎年、クリスマスにはご自宅に子供たちを招いて二人一人にプレゼントをくれましたし、阿寒湖小学校



今後の阿寒湖を担う

——小林 志恵美子さんご夫妻

と中学校にピアノも贈ってくれました。ご自身にお子様がいなかった中で、子供のことはいつも気にかけてくれました。そのピアノはもう三十年以上もたつのにまだ弾けることが分かったんですよ。

阿寒湖の人々の結束力は強いのです。特にそれが発揮されるのはお葬式ですね。五つの町があるのですが、町内できっちり役割分担が決められ、整然と執り行われます。奥様方の炊き出しは見事なものです。一方、競争意識も半端ではありません。年に一度の運動会では応援も含めて熾烈な競争をします。残念ながら最近ではそこまで元気はなくなりましてが……(笑)。阿寒湖の自然が厳し

いだけに団結しないと生きていけなかったでしょうね。まさに運命共同体ですが、逆に「しがらみ」だらけという面もないことはないです。

近年、人口が減って高齢化が進み、まちなかのメンテナンスができなくなってきました。これからは阿寒湖を国立公園としてだけではなく、世界遺産登録も見据えて、より美しく保つための組織体制づくりが大切ですね。

(一)ばやし かずし・えみこ

(二)〇二二年八月三日談

聞き手：梅川智也・後藤健太郎

まりも倶楽部／二〇〇一年に創設された女性によるまちづくりグループ。農林水産省 釧路新聞などとさまざまな表彰を受けている。

た。十年以上が経過し、改めて思うことは、「人」、つまりリーダーとカウンターパート、そして外部有識者に恵まれたこと。地域の意志決定機関である「組織」づくりが戦略的に行えたこと。環境省、国土交通省、そして釧路市など行政からの温かい協力があつたことなどが、プロジェクト実現のポイントであつたと考えられています（注2）。

これからの『創生計画2020』、そして百年後を目指して

『再生プラン2010』は、PDC Aサイクル（注3）に基づいて、三年ごとに二回の見直しを行い、常に生きた計画としてブラッシュアップしてきました。毎年一回開催する「阿寒湖温泉グランデザイン懇談会」（注4）には、一步園の前田三郎理事長が必ず出席し、われわれの取り組みを叱咤激励してくれました。二〇二一年六月からは、次の十年を見据えた『阿寒湖温

泉・創生計画2020』がスタートしています。そのなかの優先課題は、二〇〇八年に閉鎖されたあるホテルの跡地・約三ヘクタールの活用です。ここは、先述した二代目・正次が地元の人々のために設立した（株）前田一步園製材所の跡地でもあるのです。当初想定していたほど木材需要が伸びず、後を引き継いだ光子もその経営には随分と苦労したようです。二〇二二年秋、三十年ぶりに広大な更地となつて前田一步園財団に返還されることとなっています。温泉街のほぼ中心部に位置し、国道とも接する広大な土地をどう有効活用していくかは、阿寒湖温泉百年の計画として英知を集めて検討していくべき課題だと認識しています。



写真4 『阿寒湖温泉・創生計画2020』

阿寒湖の魅力

——自然と文化の承継

また「阿寒湖のマリモ」が一九五二年（昭和二十七年）に国の特別天然記念物に指定されてから六十年を迎えました。釧路市教育委員会マリモ研究室の若菜勇学芸員が「北半球各地に生息するマリモは、日本起源の可能性が高い」との研究成果を発表したことから、阿寒湖の世界自然遺産登録を目指す取り組みが活発化しています。世界遺産登録の意味と阿寒湖で取り組む意義を再確認し、これも百年の計として適切に進めてほしいと願っています。

前田理事長は、阿寒湖の魅力は、「火山と森と湖」が織りなす美しい自然景観が基本であり、その上でのマリモやアイヌ文化などである」と語っておられます。私もまさに同感であり、子々孫々、この阿寒湖の自然と文化を伝え残していく、そして阿寒湖に住む人々を大切にする前田一步園の理念を、「地域の心」まちづくりの遺伝子」として語り継いでいってほしいと願うものです。

最後に、前田正名の遺訓をご紹介します。

したいと思えます。

「後の世の春をたのみて

植えおきし

人の心の桜をぞみる」

【謝辞】

本稿執筆に当たり、（一財）前田一步園財団 前田三郎理事長、並びに新井田利光常務理事に大変お世話になりました。ここに感謝の意を表します。

（つめかわ ともや）

（注1）一八七〇～一八七二年、プロイセン対フランスの戦争。

（注2）阿寒湖温泉におけるまちづくりの取り組みについては、当財団発行「自主研究レポート」や日本観光研究学会学術論文集等をご参照ください。

（注3）Plan（計画）、Do（実施・実行）、Check（点検・評価）、Action（処置・改善）の四つの段階を繰り返しながら、将来ビジョンの目標を達成するためのプロセス、手法。

（注4）『再生プラン2010』、そして『創生計画2020』の進捗状況をチェックし、計画の適切な進捗管理についてアドバイスを外部有識者等からなる会議。

【参考文献等】

- ・人物叢書『前田正名』一九七三年一月、祖田修著、吉川弘文館刊
- ・前田一步園財団「10年の歩み」一九九二年十月（財）前田一步園財団
- ・前田一步園財団「20年の歩み」二〇〇三年十月（財）前田一步園財団
- ・前田理事長講話二〇二二年一月（財）前田一步園財団 理事長 前田三郎